

Nagoya Citizens Art Festival 2017

=名古屋市民芸術祭2017参加=

NymphéArt le 13e concert
ニンフェアール第13回公演

pour le 70e anniversaire de Tristan Murail

トリスタン・ミュライユ70歳記念公演

œuvres pour ondes martenot et piano
オンド・マルトノとピアノによる作品特集

愛知県芸術劇場 中リハーサル室

2017.10.1 (日) 18:30 開演

主催：ニンフェアール

共催：愛知県芸術劇場

助成：公益財団法人 全国税理士共栄会文化財団

公益財団法人 朝日新聞文化財団

後援：在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本

アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会

日仏現代音楽協会



==ご挨拶==

本日はお忙しい中、ニンフェアール第 13 回公演にご来場頂き、有り難うございます。2005 年の第 1 回公演から毎年続けてこられましたのも、ご来場下さる皆様、ホール関係者、公演に関わって下さる方々の暖かいご支援の賜物であり、心からお礼申し上げます。

本公演では、2017 年 70 歳を迎えたフランスを代表する国際的な作曲家の一人であるトリスタン・ミュライユの作品、彼に関係する作曲家の作品を特集致します。ミュライユは、作曲家オリヴィエ・メシアンの弟子であり、また、オンド・マルトノ奏者のジャンヌ・ロリオの弟子でもありました。その為、オンド・マルトノを知り尽くした傑作が多々あります。あまり聴く機会のない 2 台オンド・マルトノの作品も、国際的に活躍するオンド・マルトノの日本での第 1 人者である原田節と、ジャンヌ・ロリオの最後の弟子である市橋若菜による演奏で楽しんで頂きます。また、愛知県を中心に国際的に活躍する内本久美によるピアノとオンド・マルトノによる演奏も聴き所です。プログラムには、ミュライユ、メシアン作品とともに、ニューヨークのコロンビア大学でミュライユの弟子であった伊藤美由紀、大西義明の新作も含まれます。1928 年にフランス人電気技師であるモーリス・マルトノにより発明された電波楽器であるオンド・マルトノも来年 90 年を迎えます。オンド・マルトノの個性的で魅惑的な音響を堪能できるまたとない貴重な機会となります。

ニンフェアール公演では、毎回、ユニークな楽器編成、コンピュータ・テクノロジーを導入することで、音響的な発見、可能性に取り組んでおります。戦後、テクノロジーの発展によりコンピュータの応用は、音楽の世界でも必須となっており、演奏とテクノロジーの様々な関わり方により多様な作品が生まれつつあります。第 1 次世界大戦中に通信技師の任務についていたモーリス・マルトノは、三極真空管の発信された音に関心をもったことで、オンド・マルトノを開発することになりました。ミュライユは、1970 年代、当時、まだ未踏の分野であったコンピュータ・テクノロジーを音楽に様々な形態で応用し、新しい音楽のスタイルであるスペクトラル・ミュージックを確立した第一人者でもあります。本公演では、デジタルサウンドではなく、アナログなサウンドで神秘的で微妙な音色の変化、音楽の無限の可能性を皆さんに体感して頂きたいと願っています。

2017 年 10 月 1 日

ニンフェアール・伊藤美由紀

ニンフェアール

2005 年愛知県で開催された国際芸術フェスティバル参加を機に結成。ニンフェとは、フランス語の睡蓮の意味で、ギリシャ語の乙女、蛹を意味するニンフとをかけており、アールは、フランス語でアートを意味する。美しく新鮮で、将来への可能性を秘めた芸術作品を名古屋で紹介する。ヴィオラ・ダモーレとリコーダーによるニンフェアール第 1 回公演『古楽器の現在』から始まり、愛知県にゆかりのある作曲家、演奏家を招聘し、テクノロジーの使用、映像作家とのコラボレーション、ユニークな楽器編成など、毎回、個性的なアイデアで企画。2014 年第 10 回公演『東洋と西洋の絃』にて、チャレンジ精神に満ちた企画で且つ公演成果の水準の高い優れた公演に送られる、第 14 回佐治敬三賞を受賞。

= Programme =

Première Partie

1. トリスタン・ミュライユ：《マッハ 2.5》（1971）2台オンド・マルトノの為の
Tristan Murail : *Mach 2.5* (1971) pour 2 ondes Martenot
2. トリスタン・ミュライユ：《ガラスの虎》（1974）オンド・マルトノとピアノの為の
Tristan Murail : *Tigres de verre* (1974) pour ondes Martenot et piano
3. トリスタン・ミュライユ：《別離の鐘、微笑み…オリヴィエ・メシアンのおもいでに》
（1992）ピアノの為の
Tristan Murail : *Cloches d'adieu, et un sourire... in memoriam Olivier Messiaen* (1992) pour piano
4. オリヴィエ・メシアン：《未刊の音楽帖》 オンド・マルトノとピアノの為の
Olivier Messiaen : *Feuillets inédits* pour ondes Martenot et piano

休憩

Deuxième Partie

5. 大西 義明：《*Envoi III*》（2017）オンド・マルトノの為の12のマイクロ・ストロフ（世界初演）
Yoshiaki Onishi : *Envoi III* (2017) - douze micro-strophes pour ondes Martenot (création mondiale)
6. 伊藤 美由紀：《空間透明度 II》（2010）オンド・マルトノとピアノの為の
Miyuki Ito : *La transparencia del espacio II* (2010) pour ondes Martenot et piano
7. 伊藤 美由紀：《二重星 II》（2017）（トリスタン・ミュライユに捧げる）
2台のオンド・マルトノの為の（世界初演）
Miyuki Ito : *Étoile Double II*, dédié à Tristan Murail (2017) pour 2 ondes Martenot (création mondiale)

原田 節（オンド・マルトノ） Takashi Harada, ondes Martenot (1, 4, 5, 6, 7)

内本 久美（ピアノ） Kumi Uchimoto, piano

市橋 若菜（オンド・マルトノ） Wakana Ichihashi, ondes Martenot (1, 2, 7)

トリスταν・ミュライユ (1947~) *Tristan Murail* (作曲家・オンド・マルトノ奏者)

フランスの北西部、ル・アーヴルに生まれる。フランス国立東洋言語文化学院では、古典アラブ語、北アフリカ系アラビア言語の学位と、経済科学の学位を得ると同時に、音楽の研究も続けていた。1966年、パリ・スコラ・カントルムのオンド・マルトノクラスに入学し、ジャンヌ・ロリオに師事。翌年1967年、パリ国立高等音楽院でオリヴィエ・メシアンの子供となり、同時にパリ政治学院でも学業をすすめて卒業する。1971年には、ローマ賞を受賞、後にパリ音楽院の作曲学部で1位を受賞し、ローマのヴィラ・メディチで2年間、作曲活動を行う。1973年にパリに戻り、同世代の作曲家、演奏家とともにアンサンブル・イティネレーレを創設する。アンサンブルは、楽器とライブエレクトロニクスの分野で、たちまち広く認知されるようになる。1980年代には、音響現象の分析、シンセシスの更なるリサーチの為に、コンピュータ・テクノロジーを応用するようになる。自分自身のマイクロ・コンピュータ支援作曲のシステムを開発し、1991-97まで作曲を教えていた IRCAM と共同でリサーチをすすめた。そして、コンピュータ支援作曲プログラム Patchwork が生まれる。現在では、ソフトウェア OpenMusic と名前を改めて更に開発され使用されている。1997年にニューヨークのコロンビア大学の教授に就任し、2010年まで教える。その後、ヨーロッパに戻り、世界中でマスタークラス、セミナーに招聘され続けるとともに、作曲活動に専念する。現在、ザルツブルク・モーツァルテウム大学の客員教授、上海音楽院の客員教授を勤める。 www.tristanmurail.com

◎トリスταν・ミュライユ作曲のオンド・マルトノ使用作品リスト

- ・ *Mach 2.5* (1971) 《マッハ 2.5》 2台のオンド・マルトノ
- ・ *Les Miroirs Etendus* (1971) 《拡がる鏡》 オンド・マルトノとピアノ
- ・ *Les Nuages de Magellan* (1973) 《マゼラン星雲》 2台のオンド・マルトノ、エレキギター、打楽器
- ・ *Tigres de verre* (1974) 《ガラスの虎》 オンド・マルトノとピアノ
- ・ *Mach 2.5* (1976) 《マッハ 2.5》 6台のオンド・マルトノ
- ・ *Les Courants de l'espace* (1979) 《空間の流れ》 オンド・マルトノ、シンセサイザー、オーケストラの為の
- ・ *La Conquête de l'Antarctique* (1982) 《南極征服》 オンド・マルトノソロ

◎オンド・マルトノ

フランス人の電子技師モーリス・マルトノ(1898-1980)により開発される。1914-18の第一次世界大戦中、マルトノは、軍隊で通信技師として任務に就き、三極真空管によるラジオ局の発信する音に関心をもったことで、このテクノロジーを戦争の為ではなく、人間の感性を表現するための楽器を作りたいという希望をもつようになる。戦後1928年に、彼の最初の発明楽器である『オンド(電波)・ミュージカル』による初めてのコンサートを行う。その後、様々な研究を続け現在の形として完成し、開発者の名前に因みオンド・マルトノと名付けられる。鍵盤型の楽器であるが、単音による発音しかできない。しかしながら、素早いトレモロ奏法によりスピーカーをコントロールすることによって、擬似的な和音のような音を表現する事が可能である。鍵盤とリボンによる2種類の奏法があり、鍵盤は、6オクターヴ72鍵ある。ワイヤーのついた指輪のことをリボンとよび、右手の人差し指にはめて演奏し、グリッサンド効果が可能である。左手は、操作盤の上で音量、アーティキュレーション、アタックなど繊細なニュアンスをトゥッシュによりコントロールする。また、メインのプリンシパル・スピーカー、残響を特徴とするレゾナンス・スピーカー、銅鑼の金属的な音を特徴とするメタリック・スピーカー、蓮の花びらを模した形をし、両面に張られている弦を振動させるパルム・スピーカーの異なったスピーカーを切り替えることで、様々なエフェクトをかけることが可能である。参考: *Technique de l'onde électronique* 著:ジャンヌ・ロリオ(フランス語、英語)

= 1部 =

1. トリスタン・ミュライユ:《マッハ 2.5》(1971) 2台のオンド・マルトノの為の

この作品が作曲された頃は、まだオンド・マルトノはあまり注目されることはなかった。当時は、疑い深く謙遜し、まるで時代遅れの音楽、あるいは、映画音楽の効果音のようにみなされていた。現在では、電子音がある程度発展し、この考え方は馬鹿げており、50年代、60年代の方法論で書くことはあり得ない。その方法では、エレクトロニクスやコンピュータ音などの新しい音の実体や、古典的な音の定義に帰さない新しい楽器の音を知覚することは不可能である。《マッハ 2.5》を振り返ってみると、特に、音に対する新しい態度の初期の形跡として、興味深く思い出される。オンド・マルトノは、現在では、それがどんなものであるかということを知覚されている。洗練された電子音の発電機を意味し、声やサクソフォンの代用や、ハリウッド・スタイルの音源の代用物ではない。私の関心は、全ての電子楽器やシステム設計を含み、今日の驚くべき発展まで広がった。《マッハ 2.5》は、この楽器のリサーチ期間の後、素早く書き上げた。残響の現象、素早いトリルや打撃による疑似ポリフォニーなどは、極端なまでに押し進められたオンド・マルトノの特性から自然に生まれた結果である。基本的に鍵盤の上で演奏されるメシアンの好んだりボン奏法による旋律的效果は、使用していない。レゾナント・スピーカーを同時に使用することで、鍵盤上での可能な限り素早いスピードにより、たとえ単旋律であっても、動いている音の塊を創造することが可能である。作品の構造を構成している固定されたなかでのスピードの効果である音の靄である。超音速旅客機コンコルドが、1970.11にマッハ2を超えた事に因んでタイトルがつけられた。

2. トリスタン・ミュライユ:《ガラスの虎》(1974) オンド・マルトノとピアノの為の

タイトルは、アルゼンチンの作家、ホルヘ・ルイス・ボルヘス(1899-1986)の代表的な短編小説『伝奇集』(1944)の一遍である『トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス』(1940)からきている。作品は、A音の倍音に基づいており、新しいオブジェクトを再構成している。高音は、低音を生じ、レガートは、スタッカートとなり、長い音は、いつのまにかトリルに変容される。ピアノは、主に打楽器的な役割をし、その残響が主に使用されている。この作品では、パルム・スピーカーの調弦をA音とその倍音を強調するように変えられている。

3. トリスタン・ミュライユ:《別離の鐘、微笑み… オリヴィエ・メシアンの思い出に》(1992) ピアノの為の

この控えめな小品は、ドイツのドイチュラント放送(旧ベルリン RIAS)ラジオ局の依頼により、オリヴィエ・メシアン(1908-1992)の思い出として書かれた。メシアンの初期の作品の一つである『ピアノ前奏曲集』の6曲目《苦悩の鐘と告別の涙》(1929)から、いくつかの特徴(論理的思考、メシアンのこの作品の最後の3つの音など)を取り入れている。ミュライユの他の多くの作品でも特徴としている鐘の特質とともに混ぜ合わせようと試みた。これらは、最終の別離はないという過去の「苦悩」と「涙」に打ち克とうと試みたメシアンの晩年の作品《ほほえみ》(1989)のように、快活な調性による光の残響、和音のクラスターにより応えられている。

4. オリヴィエ・メシアン:《未刊の音楽帖》 オンド・マルトノとピアノの為の

オリヴィエ・メシアン(1908-1992)は、オンド・マルトノのための作品を数々書いている。6台のオンド・マルトノの為の組曲《美しい水の祭典》(1937)の後、《神の顕現の3つの小典礼》(1944)と《トゥランガリーラ交響曲》(1946-48)のなかでオンド・マルトノに重要な役割を与えており、オペラ《アッシジの聖フランチェスコ》(1983)では、3台のオンド・マルトノを使用している。《未刊の音楽帖》は、作曲家の死後、2001年に出版された。メシアンの妻でありピアニストであり、オンド・マルトノ奏者として著名なジャンヌ・ロリオの姉であるイヴォンヌ・ロリオによりまとめられた。4曲から構成されるこの作品の4曲目の原稿には、"Déchiffrage" (解読)とタイトルされている。この作品は、メシアンの作品の特徴の一つである「鳥の歌」を使用している。2曲目の最後のピアノソロは、クロウタドリ(Merle noir) (1987. 4. 29 採譜)、3曲目の各々のソロ部分は、ニワムシクイ(Fauvette des jardins) (ウグイス科の小鳥) (1988. 7. 7、ソローニュ)、ズグロ(Fauvette à tête noire) (頭部の黒い小鳥) (1988. 7. 9)と譜面上に記載されている。これらの作品で、メシアンは、オンド・マルトノのテクニック、音色、異なったスピーカーの使用についての的確な指示を与えている。

・オリヴィエ・メシアン(1908-1992): フランス、アヴィニオン生まれの20世紀を代表する国際的な作曲家の一人であり、オルガン奏者でもある。敬虔なカトリック信者であり、キリスト教信仰の神秘、精霊の神秘をテーマとした作品が多数ある。鳥の複雑な音色とリズムに魅了され、音として体系化しようと努めた。鳥の声、他言語からの音韻など、リズムの探求は、彼の作品において不可欠である。パリ国立高等音楽院の教授として、ピエール・ブーレーズ、シュトックハウゼン、クセナキス、トリスタン・ミュライユ、ジェラール・グリゼイ、ほか、独自の音楽語法で国際的に活躍し、後世に偉大な功績を残している作曲家達に多大な影響を与えた。

= 2部 =

5. 大西 義明:《Envoi III》(2017) オンド・マルトノのための12のマイクロ・ストロフ(世界初演)

文学において、**envoi**とは、作者の締めくくりの言葉であり、特にバラードにおいては特定の人に呼びかける末尾連、または反歌を意味する。現在のフランス語においては、**envoi**とは小包や手紙を『送る』ことなど、ごく普通の生活上のコンテキストで使われることが多いようだ。ところで、**envoi**という範疇で言葉を書いた作者は存在するのに対して、その言葉を受け取る側は、場合によっては特定の人に限られないことがある。今生きている人に宛てられたものかもしれないし、もしくは空想上の人物、もしくは過去の人に宛てられたものかもしれない。そのような自由さを孕んでいる**envoi**という概念に着目し、2015年以来私はそのタイトルの下、作品を書き連ねている。オンド・マルトノのための本作品はその三曲目となる。**Envoi III**は、ニンフェール第13回公演、及びトリスタン・ミュライユ70歳記念のため、主宰である作曲家伊藤美由紀さんの依頼によって書かれた。機会を与えてくださった伊藤さんに感謝する。また、本作品をオンディストである原田節さんと私の師であるトリスタン・ミュライユに献呈する。

6. 伊藤 美由紀:《空間透明度 II 》(2010) オンド・マルトノとピアノの為の

この作品は、現在3作品ある《空間透明度》シリーズの2番目の作品で、シリーズ1曲目は、ヴィブラフォン、アンティーク・シンバルとエレクトロニクスの為の作品、シリーズ3曲目は、2台ピアノ、2名の打楽器奏者とエレクトロニクスによる作品である。コンサートでメキシコを訪れた際に、メキシコ人建築家ルイス・バラガンの自邸を訪れインスピレーションを受けたことに基づいている。バラガン邸は、メキシコ市内にあふれるメキシカンピンクを生かした壁の色、空中に浮かんでいるかのように見える不思議な階段をはじめ、画期的な色遣い、空間配置がされており、天井には一切電気はついておらず太陽光にこだわり、計算尽くされた窓の場所、大きさによって、微妙な光、影が空間を作り出すように設計されている。まるで迷宮のようにそれぞれの部屋は繋がっている。次の部屋に入るたびに新たな発見があり、また、それぞれの部屋との関係をもっている。バラガンは、「建築は、内側から考えるべきだ。」と語る。外から見ただけでは想像のつかない彼の精神世界が、建築物の内部に創造されているかのようなのである。私は、彼の建築空間を音楽空間のように、作曲と建築とのつながりを強く感じた。シリーズ2曲目のこの作品は、オンド・マルトノ奏者の大矢素子による委嘱作品で、彼女により2010年に東京オペラシティで初演された。オンド・マルトノとピアノによって、バラガン邸から感じ取った色、光、空間を音響空間に創造しようと試みている。

7. 伊藤 美由紀:《二重星 II 》(2017) 2台のオンド・マルトノの為の(世界初演)

《二重星》シリーズ作品は、同じ楽器2台による楽曲となっており、シリーズ1曲目は、今春、ニューヨークで初演された2台のヴァイオリンのための作品、シリーズ3曲目は、12月に初演予定の2台のギターの為の作品である。本作品を1曲目の制作前に考えていたため、オリジナルのタイトルは、オンド・マルトノがフランスで開発された楽器である事からフランス語で《*Étoile Double*》である。『二重星』とは、地球から光学望遠鏡で眺めた際にお互いに接近して見える2つのペアとなる星を意味する。実際は、それらは異なった距離に存在するので、光学上の2重(類似物)である。このアイデアに応じて、聴覚的2重の状況を創造し、2台の楽器は、絶えず動き、微分音や複雑なリズムを変容させ、微妙に異なっているが類似したジェスチャーにより溶け込んでいく。それらのジェスチャーは、オンド・マルトノの場合、異なった種類のスピーカーを組み合わせる事で、音楽的な遠近感と宇宙の架空のパノラマを創造する。オンド・マルトノとエレクトロニクスの為の《心の迷路》(2003)、オンド・マルトノとピアノの為の《空間透明度 II》(2010)、オンド・マルトノ、クラリネット、ギター、エレクトロニクスの為の《プロメテウスの光》(2011)に続く、4曲目のオンド・マルトノを使用した作品となる。オンド・マルトノという楽器、そして原田節さんとの出会いのきっかけを下さった恩師トリスタン・ミュライユに捧げる。

* 1.2.3.トリスタン・ミュライユ・(日本語訳:伊藤美由紀)、4.6.7.伊藤美由紀、5.大西義明

==プロフィール==

●原田 節(オンド・マルトノ):3歳よりヴァイオリン、7歳よりピアノを始める。強烈な自己表現能力に優れたオンド・マルトノとの出会いを機に、慶応義塾大学経済学部を卒業後渡仏、パリ国立高等音楽院オンド・マルトノ科を首席で卒業、オンド・マルトノを独奏楽器として扱う世界で数少ないソリストとしての演奏活動を開始した。ピアノを遠山慶子、オンド・マルトノをジャンヌ・ロリオ女史に師事。作曲家としても、オーケストラ作品から独奏曲、また数々の映画やアニメに至るまで幅広い分野でその才能を披露している。出光音楽賞、横浜文化奨励賞、ミュージック・ペンクラブ賞など受賞も多数。また、20世紀を代表するフランスの作曲家オリヴィエ・メシアン作曲『トゥランガリーラ交響曲』のソリストとして、日本国内はもちろん、カーネギーホール、ベルリンフィルハーモニーホール、シャンゼリゼ劇場、パリ・オペラ座、ミラノ・スカラ座といった主要な劇場における世界最高峰のオーケストラとの共演は20カ国300回を超える。2016年5月にはピアニストとしても、フランシス・プーランクのピアノ協奏曲をシンフォニエッタ静岡と共演。<http://harady.com/onde/>

●内本 久美(ピアノ):祖父・内本實の指導の下、ピアノを始める。原智恵子、深沢亮子諸氏に師事した後、渡伊。モンテヴェルディ音楽院を最高点で卒業後、イモラ・ピアノ・アカデミーのソロコースにてラザール・ベルマン、アンドラーシュ・シフ、アレグザンダー・ロンクイッヒに学ぶ。1994年よりアンサンブル・イカルのソロ・ピアニストに迎えられ、現在に至る。マンゾーニ、ブツソッティなどイタリアを代表する現代作曲家の作品を数多く初演。ヨーロッパ各地、北米、南米、ロシアの劇場や現代音楽芸術祭へ招聘を受けてコンサートツアーを行う。ストラディヴァリウス、リコルディ他からCDをリリース。愛知県立芸術大学音楽学部准教授、金城学院大学非常勤講師。

●市橋 若菜(オンド・マルトノ):千葉大学卒業、同大学院修了。原田節氏にオンド・マルトノを学び渡仏。パリ、スコラ・カントルム、オンド・マルトノ科演奏家課程を審査員特別賞つきの満場一致にて修了。故・ジャンヌ・ロリオ女史に師事し最後の弟子となる。ロリオ女史の推薦でメシアン『トゥランガリーラ交響曲』のソリストとして英国に招待されて以降、フランス各地のフェスティバルに出演し好評を得る。帰国後はサロンコンサートから各種イベント、ライブハウス、教育機関等での演奏・講義、ラジオ・TV出演など様々な分野で活躍。新作の初演、録音などジャンルを超えた幅広い音楽観でオンド・マルトノの魅力を広め続けている。CD「市橋若菜 オンド・マルトノの世界 I・II」発売中。
<http://www.ondes-martenot.com/>

●大西 義明(作曲):1981年北海道函館市生まれの作曲家、指揮者。16歳より渡米。コロンビア大学作曲家修士及び博士課程修了。作曲をファビアン・レヴィ、フレッド・レーダール、トリスタン・ミュライユ、論文指導をジョージ・ルイス、指揮をジェフリー・ミラースキー各氏に師事。2004年と2008年、札幌のパシフィック・ミュージック・フェスティバルに作曲コース生として参加。一柳慧、細川俊夫各氏に師事。作品はドイツ・ベルリンのEdition Gravisより出版されている。2011年ガウデアムス賞(オランダ)受賞。第24回および第26回芥川作曲賞ファイナリスト。<http://www.yoshionishi.com>

●伊藤 美由紀(作曲):愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了後、コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリスタン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員として IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積む。世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品の発表を続けている。また、ニンフェアール、JUMP(日米:新しい音楽の展望)の代表として自主企画公演を定期的に展開。ニンフェアール第10回公演は、第14回佐治敬三賞受賞。《時の砂》がALCD80からリリース。ミラノのスヴィーニ・ゼルポーニ出版社からフランコ・エヴァンジェリスティ国際作曲コンクール優勝作品《古代の息吹をしのぶ。。。》の楽譜出版。執筆活動として、『音楽現代』に特集記事や公演批評を寄稿。メキシコのコンピュータ音楽雑誌『Ideas Sonicas』に自作品の分析論文(英語)が掲載。今まで、名古屋芸術大学、千葉商科大学、愛知県立芸術大学大学院、愛知県立大学、四川音楽学院(中国)などで、後進の指導にもあたっている。<http://www.miyuki-ito.com>

オンド・マルトノとは?

オンド・マルトノの構造

トウツシュ

オンド・マルトノの魔法の箱。ボタンやレバーで、音の強弱や長さを表現します。操作は左手でします。音楽の表現をここで決めています。

メタリックスピーカー

内部に銅鑼が吊られています。電気の振動で銅鑼を共鳴させ、神秘的で金属的な響きを作り出します。

リボン

鍵盤の手前に1本の糸(リボン)が張っており、糸に付けられたリングに右手の指を入れてスライドさせ音程を決めます。この楽器の特徴的な演奏法です。

鍵盤

右手で演奏し、音程、音色を決めます。鍵盤数は6オクターブですが、切り替えて7オクターブの音域になります。鍵盤は本体に吊られていて、効果的なビブラートが表現できます。

バルムスピーカー

前後12本ずつ弦が張られています。電気の振動でその弦を共鳴させることでアコースティックな音響を生み出します。

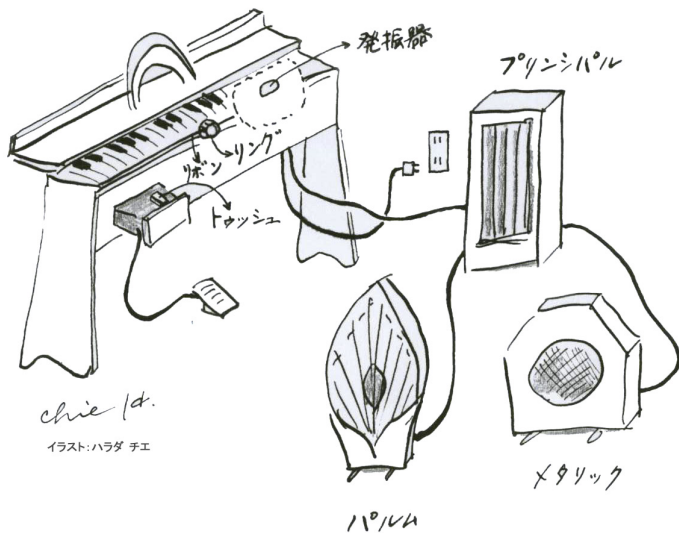
プリンシパルスピーカー

メインに聴こえる音を響かせます。

ペダル

トウツシュの役割を足でも操作します。

音の出る仕組み



オンド・マルトノの発明者

モリス・マルトノ (1898 ~ 1980)

フランスの音楽家で、電気技師。アマチュアオーケストラの指揮者でありチェリストとして音楽に対する造詣が深い人でした。

第一次大戦に通信兵として招集され、兵役中に、三極真空管から発信される音をヒントに、楽器に応用する方法を10年以上にわたって研究。電波の力で音を出す全く新しい楽器を開発しました。

1928年5月、バリのオペラ座で「オンド・ミュージカル」として最初の公開演奏会を開催。その後、改良を重ねて現在の「オンド・マルトノ」を完成させました。

1931年2月には来日し、約1ヶ月滞在。その間、楽器の演奏も披露しました。

チェロの奏者でもあったモリス・マルトノは、チェロの演奏を念頭にこの楽器を開発したため、いくつかの独創的な工夫が盛り込まれています。

